

- 土博物館友の会
 3) 伊藤浩司 (1969): 北オホーツク沿岸の植物相の一端 (北オホーツク沿岸文化財調査報告書). 北海道教育委員会
 4) 原 松次 (1990): 札幌市北東部低地帯の植物. 「北海道の自然と生物」VOL. 2, カヤ書店

オオバナイトタヌキモの 北海道現況

外山 雅寛

オオバナイトタヌキモ *Utricularia exoleta* R. Br. subsp. *gibba* P. Taylor は新大陸原産の水生の食虫植物で、日本産のイトタヌキモ *Utricularia exoleta* R. Br. の母種と考えられているものである。両者の区別は外見上では不可能のようで極めて酷似している。オオバナイトタヌキモは、花が大変大きなことによって、日本産のイトタヌキモと区別されている。

以下、北海道にて知り得たオオバナイトタヌキモの現況を記しておきたい。

北海道で確認されたオオバナイトタヌキモの現況

著者は1度オオバナイトタヌキモを培養してみたいと思っていたが、外国産のこの食虫植物が、他の水草についてきて、北海道の室内の水そうの中にごく普通に見られるものであることを知ったのはごく最近のことである。

教室内のメダカ用水そうの中で見た本種を最初はイトタヌキモと思っていたが、小宮定志博士 (日本歯科大) よりの御教示によりオオバナイトタヌキモであることが判明したものである。

本種は他の水草に混入して北海道各地の教室の水そう内で目撃されている。小学校5年生の教材にメダカの発生が取り扱われているので、恐らく全国的に見られるものと推定される。

この種は、日本の暖地に1部帰化しているようであるが、日本植物としては取り扱われてはいない。

試みに熱帯魚用の水草販売店を訪れてみたところ、やはり本種が他の水草に混入していることが確認された。繁殖力がよく、水そう内ではどんどん増える。

ただし、北海道の自然状態の中では確認されていないし、寒冷な北海道では帰化植物とはなり得ない植物であ

る。本州の暖地では、本種の逸出したものがイトタヌキモと同定されているケースは十分あり得るかもしれない。

食虫植物とは知られずに

本種が道内各地の小学校の水そうの中に見い出されたことは前述の通りであるが、それが食虫植物と気づかれているケースは全くなかった。水そう内では大繁殖するが、捕虫のうが小さいのでメダカの幼魚を取り込むことはないかもしれないが、これがタヌキモならば捕虫のうが大きいので、たちまち食べられてしまうのだが……。

岐阜県南濃町における

オニバスの現況

嶋田 直哉

岐阜県下のオニバスについては、本会員の磯部氏によって報告されている。私は、4年程前から他の目的でその地を訪れていたが、時期的なものもあって、オニバスの生育期に御目に掛かることはなかった。が、多量の種子殻が水辺に浮いていたことから、オニバスの存在は知っていた。氏の報告後、オニバスの生育は不良であるので現状を報告することにする。

南濃町のため池群は今、大きく変わろうとしている。農業用水確保のために利用してきた昔からの古池を、自然の地形を利用した釣り池にしてしまったのである。しかも、大型魚を移入し、それに伴い釣り客が使用する人工餌により土壌や水質が悪化し、水草などは殆ど消滅してしまった。また、幾つかのため池は埋め立てられてるなど、水辺の環境が悪い方に変ってきている。それと云うのも、その影には宅地開発の波が、確実に迫っていることにあった。見るかぎり水田しかない土地は、碁盤の目のように細い道と水路が走っており、所々にため池や幅の広いため池的な水路がある。開発の手始めとして道路の整備、水路の整備を行っているのである。道路の拡張工事に伴った埋め立てや、水路を直線化し、三面護岸や全面コンクリート護岸を国の援助で行っている。そのようなことが進行している今、昔ながらの古池や素掘り水路が姿を消し、そこに生きづいていたあらゆる生物が姿を消してしまった。埋め立てた跡地は開発工事のための土木資材置き場として利用したり、跡地を中心とする宅用地の開発の利用となっている。このような現状は全国的にあることで、私たちは今、二度と後にはもど

れない道を選択してしまったようである。

昨年夏、私が南濃町戸田地内で確認したオニバスは、たった1株で最大浮葉は45cmと貧弱なものであった。磯部氏の報告のように大群落は見る影も無く、他の水草は殆ど皆無に等しかった。だが、小さな水路などには逆に水草は多く残っている。特にヒシやトチカガミ、ホテイアオイなどは大群落を形成している。地元の釣り客の話によれば、最近、オニバスの若葉やガガブタの浮葉(スイレンの葉)のようなものは初夏に幾らか見られたが、その後、同じ場所に見ることはなく、いわゆる水草のようなものは、池で見ることは無いという。晩秋にガガブタの殖芽や、ヒシの実など多量にあったのを私も確認しているが、今は無く、ため池が釣り堀化した時期と、水草が見られなくなった時期がほぼ合致することから、原因は言わずとも解るであろう。水質、土壌の悪化と釣り魚による食害ではないかと考えている。まだ詳細には調べてはいないが、過去から現在において戸田地内で見た主な水草を紹介するとともに、今後とも悲しい現状を見てゆくつもりである。

南濃町戸田地内の水草

ため池内の水草

ガガブタ	(最近消滅したと思われる)
ヒシ	(未同定)
ヒメビシ	(最近消滅したと思われる)
オニバス	(最近は生育不良)
ホテイアオイ	(少ない)
コウガイモ	(少ない)
サンショウモ	(最近消滅したと思われる)

水田や用水路の水草

キクモ	
ヒシ	(未同定) (多い)
キカシグサ	
キカシグサの一種	(未同定で完全沈水性で生育するもの)
ミズマツバ	(少ない)
ミゾハコベ	
マツモ	(未同定)
コナギ	
ミズアオイ	(ヒルムシロ的浮葉を形成している) (少ない)

ホテイアオイ	(多い)
トチカガミ	(多い)
クロモ	(多い)
オモダカ	
ヒルムシロの一種	(未同定)
イトモ類	(未同定)
ミクリの一種	(未同定) (少ない)
ミズワラビ	(やや少ない)
シャジクモの一種	(多い)
カヅノウキゴケ	
イチョウウキゴケ	
ウキクサ類	(何種あるのか不詳)

ニュージーランド産 *Potamogeton* の一品

尾崎 富衛

本年1月、New Zealand 南島に旅行の際下記の如きヒルムシロ属 *Potamogeton* の一品を観察することが出来たので、ここに紹介する。なおこの地は国立公園の保護地域として採集は遠慮したが、地域環境及び植物体の概要は下記の通りである。

- 1、日時 1991年1月14日
- 2、場所 ニュージーランド南島マウントクック村マウントクック山群のセバストポール山(1588m)の中腹(alt. 約1200m)の小台地
- 3、地形等 南と西はモレーンから成る山の斜面に遮られ、東と北は開けている。池の周辺には高木無く、亜高山帯低木が疎らに生えている。
- 4、池(図1) この池は地元で Red Tarns 又は Red Lake とよばれているが、*Potamogeton* の浮葉の色によるものと思われる。東西約50m、南北約20mのほぼ長楕円形、傍にも小池2個がある。
この池は融雪水が僅かに流入、流出するために透明度高く、底面までよく光が通る。底質は腐植が少し堆積する程度で貧栄養。水深約100cm、水温は低い。
- 5、植生 水面 抽水植物はフトイに似た植物が少数生育するのみで沈水植物は全くな